



鬼退治のゲームオーバーは
屈辱的で死よりも救いようがない

俺が今、血道を上げてプレイしているのは「鬼退治」というアクションゲーム。

鎌倉時代のころをモチーフにした世界で、世に溢れる魑魅魍魎を刀で斬り倒していき、最終目標は、題名通り、ボスの鬼を退治すること。

ゲーム展開はシンプルなれど、難易度は高い。

なにせ、技の数が多ければ、コマンド入力も多くて、覚えきれないから。

その分、ここぞというタイミングでコマンド入力を成功させ、とって

おきの技が繰りだせると、会社のストレスが吹つとぶほどの爽快感が。上級者むけであり、マニア好みのゲームなれど、難易度に比例して世間での知名度も高い。ゲームオーバーになったときに流れる映像が注目されてのこと。

鬼退治では、体力ゲージがゼロになっても、操作する、もののふは死なない。倒れはするものを、満身創痍で生きたまま異形の者に髪をつかまれ、引きずられていく。

画面端までいくとムービーに切りかえ。真つ暗闇の中、両端に松明が灯る真ん中を、どこまでも引きずられていき、そのうち、画面中央に白いなかが。

近づくとつれ見えてくるのは障子の戸。

和紙に写るのは頭に二つの角が生えた、その影。

異形の者が、血だらけのものふを放ると、障子の戸が開いて、ぬつと巨大な赤い腕が出現。

頭をつまんで引きずりこむと、戸は閉めきられ、見届けてから異形の者はそそくさと退散。

異形の者が消えてから、障子に写る影が蠢き「あああああ！」と絶叫が暗闇に響きわたり。

そうして障子が開かないまま、ものもの断末魔の叫びが響くまま、徐々に画面が暗くなり、少しの間を置いて、メニュー画面にもどるという。

痛快アクションゲームにして、ホラー的な結末だが、おそろしいのは、もののふが最後まで殺されなかったこと。

どうして人を虐殺してきた鬼にして障子を血で染めあげなかった？
障子のむこうで鬼はもののふになにをしているというのだ？

当然、疑問に思うところで、ゲーマーの間では憶測がとび交っている。
憎たらしいからこそ、死んだほうがましと思うほどの責苦にあっているとか、その一環で強姦されているとか。
なかでも多くの人が考えるのが「天子さまの居場所を吐くよう拷問をうけているのでは」説。

「天子さま」とは、この世界で代々神の子として崇められてきた存在。

世に魑魅魍魎がはびこってからは、若干十六才の天子さまが、鬼退治の総大将となり、もののふたちをまとめあげ、率いている。

どれだけ魑魅魍魎が世を狂わせようと、もののふや庶民が齒を食いしばってくじけず、結束を固めるのは、そんな勇猛な天子さまが心の支えになっているから。

逆にいえば、その存在が大きすぎるが故に、失ったら総崩れとなる危険が。

鬼にしたなら、そりゃあ、天子さまは目障りであり、人間勢にとっての弱点、滅ぼすための鍵と見るわけだ。

もちろん、鬼がそう考えるだろうことは百も承知で、もののふたちは天子さまの居場所を秘密に。

情報が漏れないよう厳重管理し、影武者でない本物がどこに居るのかを知るのは、数少ない側近だけ。

その一人が、プレイヤーが操作するもののふ。

となれば、体力がゼロになっても殺されず、鬼の元につれていかれて、拷問されるのも腑に落ちる。

この説がいちばん有名だが、俺が支持をするのは「拷問でも、間者（スパイ）になるよう迫られている」説。

